

甲南女子大学の女性教育の今後を考えるプロジェクト

これからの〈女性教育〉の話をしよう

NEWS LETTER

女子学生と「アンコンシャス・バイアス」

アンコンシャス・バイアス (unconscious bias) とは、日本語では「無意識の偏見」「先入観による思い込み」と訳されます。その人の属する社会や家庭環境・体験などによって形成されるものです。

かつて女子大学＝「良妻賢母を養成する花嫁学校」と考えられてきました。また女子学生自身「女性の幸せは結婚」「リーダーとして上に立つのは無理」などの無意識の思い込みで、長く自分の視野や行動を狭めてきたように思います。現在でもこのような考えが、社会で少なからず存することは否定できません。

本学園の使命である「**社会に貢献する高い志を持つ女性を育成する**」には、まず各自の「アンコンシャス・バイアス」を考え、さらに他者（特に女性）に対しても自らの発言によってその可能性を制限していないか、立ち止まって考えたいものです。女子学生たちがこれからの人生を生き生きと輝かせるために応援したいですね。

プロジェクト共同代表者 米田 明美



コロナ禍後の女性教育

学長 森田 勝昭



2020年1月のWHOによる緊急事態宣言から1年が経ちました。人間はこれまで何度となくウイルスの脅威を経験し、その都度、ウイルスは社会の弱点や矛盾を暴露してきました。混乱の中では、個々の問題対処におわれ、“対処”が自己目的化してしまいがちです。その結果、暴かれた弱点や矛盾の本質を見失ってしまいがちです。

今回のコロナ禍では、被害が女性に集中し、女性の多い職種や非正規という「働かせ方」の矛盾が問われました。これは女性の根源的な問題です。一方で、医療職などエッセンシャルワークでの女性の献身的活動が顕著で、人間の尊厳と勇気と力を目のあたりにしました。大学も大きく揺さぶられました。貴重な経験を提供するはずのキャンパスの閉鎖は、大学に存在意義の根本的な見直しを迫りました。290万の学生の未来を創る教育はエッセンシャルワークそのものだと、あらためて考えました。

女子大学には根源的な問いが突きつけられています。社会変動の波が押し寄せる困難な時代に本学は、教育は「社会的共通資本」という考えに立ち返り、女性教育の未来を創り出していきます。学園創立100周年を迎え、今年、101年目の歩みを始める大学の決意です。



国際学部 国際英語学科 開設記念 オンラインシンポジウム

「英語で紡ぐ私たちの未来」、実施報告

プロジェクト共同代表者 ウォント盛 香織
国際英語学科教授 谷川 冬二

2020年12月12日(土)に、オンラインシンポジウムを開催した。対象は主に学科1年生であり、学生、教職員、学外の方等、計127名が参加した。本学科は、国際英語学科になるにあたって、希望者全員留学を打ち出した。留学を志し、本学科を選んだ学生が多いため、コロナウイルスによる留学機会の喪失は、一部の1年生にとって学びの意欲喪失になっていることが、学生との日々の会話から伺われていた。

シンポジウムの詳細は、谷川先生の手稿に譲るが、本シンポジウムを通じて、英語力を伸ばすことは、留学をしなくてもできることや、英語を使って仕事をするためには、今大学で知識と経験を深めていくことが大切である、といった励ましの言葉を、登壇者の方が学生に送ってくださり、学生はとても力づけられたようである。それは、学生のシンポジウムに関するレポートから伺われた。例えば、ある学生は、「卒業生の先輩方のアドバイスは勉強や留学、就職など様々なことで悩んでいた私にとって、とても励みになるお話しでした。また、英語だけでなく、自国について、日本についても学ぶべきという言葉には同感しました。国際学部だからと言って英語だけを極めるのではなく、日本の文化や歴史にも目を向ける必要があると改めて感じました」と振り返った。また、ある学生は、「留学を考えていたけれど今この状況で難しくなってしまった。[3年生で留学をした先輩の話聞いて]不安が一気に晴れてよかった。やはり自分よりも長く生きている方々の話は、自分には考え付かなかった話などが聞けるのでためになった」と述べていた。

学生たちは、先輩の女性たちの話を聞く中で、自分の中で抱えていた不安を払拭でき、刺激を受けたようである。シンポジウムは、年上の女性たちが若い女性たちのエンパワーメントをし、女性間での世代を超えた連帯を可能にした点で、教育的意義のあるものであったといえるだろう。(ウォント盛香織)



シンポジウム登壇者の写真

甲南女子学園の創立100周年を記念して、また国際学部国際英語学科の開設を記念して、シンポジウム「英語で紡ぐ私たちの未来」を開いた。基調講演をお引き受け下さったのは、田代礼子氏、タイトルは「英語は世界へ羽ばたく翼」である。昨今の事情からオンライン形式で行ったので、開始前は少なからず不安であった。

しかし、学生たちからのフィードバックを読むと、所期の目的を果たせた、と思う。彼女らの未来にさまざまな選択肢があることを伝えられた、と安堵した。なにが印象に残りましたか、という事後の問いかけに、学生たちが文章で答えてくれた。

それを読むと、田代氏から「英語を誰のために使うのか」という問い、「困難があっても英語は学べる」という事実、「やらない後悔よりやる後悔」という積極性、パッションを受け取り、卒業生の方々の証言から、それらが自分たちの日常の中にあることを実感したことがわかる。

男は戦え、女はそうして欠けた命を生んで補え、という思考が性差による差別の根底にある、と私は考えている。そして、リーダーとしての地位に立つ女性の数が、この国では今も圧倒的に少ない。そんな状況下で、戦禍の極である原子爆弾をめぐって、英語の力で果敢に世界と関わろうとされてきた田代氏の姿も、素直に学生たちに受け止められたようだ。

このたび登壇を快諾して下さった田代さん、卒業生の方々のおかげで、また同様の試み続ける意義を、私たちは確かめられた。これを繰り返すことで、どんな契機をどう活かすか、より多くの若者の心に届けられる、と信じられるようになった。この意味で、真摯にフィードバックしてくれた学生たちにも礼を言わねばならない。(谷川冬二)

1. オムニバス授業「大学を知る」について

前期に開講された新入生対象の全学共通教育科目「大学を知る」というオムニバス形式の授業の最終回で、「女子大学で学ぶ意義」というテーマで講義する機会を得た。この授業は、本学の教育理念・歴史および特色、大学が提供する様々なサポート体制について理解を深め、本学で学ぶ意義を考えてもらうことをねらいとしている。今年11学科にわたる新入生299名が受講した。

2. 最終回「女子大学で学ぶ意義」の講義内容

私の授業回では、これまで耳にしてきた学生の素朴な疑問や意見（なぜ男子大学は無いのに女子大学はあるのか？「女性」を意識しすぎない方がいいのではないかな？ジェンダー不平等を実感できないが実際どうなのか？等）を出発点に講義を進めた。内容は、日本の女子大学の起源と女性の大学進学率の推移、女子大学を取り巻く昨今の状況に始まり、「女性」という記号が女性に与えている社会的影響（日本のジェンダー不平等の現実）、筆者の個人的見解としての女子大学が果たすべき役割や女子大学の強み（下記スライド参照）、女子大学がもつ弱点（緊張感のなさや馴れ合いが生まれやすい、実際の社会とは異なり「女子学生のみ」は不自然で特殊な環境であること）について講義した。また本学の取り組みとして、共通教育科目における女性教育や、本学教職員有志による草の根の取り組みとしての女性教育プロジェクトを紹介した。

女子大学の強みとは？

- ・異性のまなざしからの自由。
- ・学生同士の親密性と連帯性が生まれやすい。
- ・女性の多様性が見えやすく、自分らしくいられる（肯定されやすい）。
- ・多様なロールモデルに出会える。
- ・リーダーシップや自主性を発揮するチャンスが多い。
- ・女性にとって重要な問題により関心を払う教員が多い。
- ・性別役割分業が強まる大学卒業の前に、一般的なものとは異なるイメージをもちながら、自分の可能性を探ることができる。

3. 受講した新入生の反応は？

1) 「女子大学への不安と偏見」から「女子大学の強み」の気づきへ

授業を通じて、女子大学の強みの気づきが促されたと同時に、「以前はこう思っていた」と、女子大学への不安やマイナスイメージが吐露されたことも印象的であった。「共学の方がよかったと思っていた」という学生は決して少なくない。恐らく入学して間もない時期で不安も大きかったことあると思うが、本講義を受けて「女子大学に入学して良かったと強く思う」「今は全く後悔はない」との声が多数あった。

「何よりも自分が女性であることに誇りをもって生きることができるということに魅力を感じた」など、女性の多様性が肯定される、自分らしくいられることに強く反応する記述が多数あった。中には、女性に対する差別を思うにつけ、自分自身の女性という記号について肯定しきれない複雑な思いを持ってたと吐露する学生もいた。彼女たちにそう思わせてしまっているのは何なのか

考えさせられる。そして、大学における女性の多様性を尊重し合う経験、多様な女性同士の連帯そのものが、その後の人生の強みや困難を乗り越える支えになると述べる学生もいた。またオンライン授業ながら、授業中の発言のしやすさなどを実感し、すでに女性だけの環境に安心感や居心地の良さを感じている新入生（特に共学出身者）も相当数いたことは、新鮮な驚きであった。

私が考える女子大学の意義

「女性のための女子大学」であること。
「本気で女性を応援する女子大学」であること。

多様な女性の生き方を肯定し、
一人一人が

安心して、自信を持って、自由に生きる
ことを応援すること。

2) 女性のための学びの重要性への気づき

今の自分はなぜジェンダー不平等を実感していないのか、なぜ女性のおかれている状況について学ばなくてはならないのかについて、大きな気づきがあったという反応はかなり見られ、女性という記号をもって社会に出る前の、必要な学びがあることに、多くの学生が女子大学で学ぶ意義を見出していた。

また女子大学で学ぶ自分自身のミッションを見出した学生が一定数いたことは嬉しいことであった。「女性を特別扱いするという意味ではなく、女性が社会で男性と対等になったその先に、女性も男性も共に自信を持てる世の中にしていくことが最終的な目標だと気づくことができた。その目標に向けて、この大学で学ぶ私たちは自分たちもイニシアチブをとり、男性を巻き込みながらジェンダー不平等が残っている日本社会をよりよくしていくミッションを持っていると心に留めていくべきだと思った」などの意見が聞かれた。

3) 女性を応援する取り組みとメッセージがもつ可能性

女性教育プロジェクトの取り組みや、「本気で女性を応援する女子大学」というメッセージは、学生に心強さ、安心感、勇気を大いに与えることがわかった。「そういった環境で自分たちが勉強できていることに感謝したい」「プロジェクトが他の大学でも増えて欲しい」「女性教育カリキュラムで、15回のうち1回は女性ということに関連づけて学べるのがとても良いと思う」「図書館の女性関連図書のコレクションが、学生のためだけでなく教職員の方も一緒に考え取り組んでくださるためであることがとても心強い」という声があがった。私たち教職員の取り組みそのものやメッセージが、いかに学生たちにとってエンパワメントとなりうるのか確信を持つことができた。

女性だけを集めて教育すれば、意義ある女性教育が成立するわけではない。私たちはどのようなビジョンで学生にメッセージを発信し教育するのか。女子大学だからこその働きかけの意義を、改めて確認した貴重な機会であった。



<2020年を振り返って～学生とともに考えた「私たち」の未来～>

リレーエッセイ

プロジェクト共同者 高橋 真央

6月から9月にかけて私の4年ゼミでは、「シナリオプランニング」という手法を使って、オンラインで「未来(2030年)の私たちの暮らし」について数回に分けて考えました。10年後の世界、日本社会はこのコロナ禍を経てどのように変化しているのか? 自分たちの仕事はどう変わっていくのか? また、女性のライフスタイルはどのように変化しているだろうか? というものでした。これは、将来に向けて、外部環境要因について不確実性が高い/低いものと影響力が高い/低いものについて4象限でシナリオを考えていくのですが、学生たちが2030年に最も不確実性が高いこと(つまり、実現可能性が低いこと)にあげた一つが日本における「女性の首相」の誕生でした。「女性の首相が誕生したら、日本社会や経済に対するインパクトは大いにあるけど、10年でそんなことにはならないよねえ」「やっぱり、それは難しいんじゃない? だから、これは不確実性が一番高いよ!」「でも、そんな社会が早く来てほしいなあ」そんな話がオンラインの画面越しに彼女たちから交わされました。

私が学生時代であった20年前。「女性の首相」が誕生したらどうなるか、政治はどう変わるのか? そんなことを想像することも、友人同士で話をすることもありませんでした。しかしながら、今、目の前の彼女たちは10年後の未来と日本社会について「女性の生き方」を語り合っており、その姿を見ながら、時代の変化と彼女たちが抱く未来への期待に私も胸が躍りました。

そして、2020年11月のアメリカ大統領選挙。カマラ・ハリス氏という女性の副大統領候補が誕生しました。勝利宣言のスピーチでは、「私は最初の女性の副大統領かもしれないが、最後ではありません」というメッセージは、アメリカだけではなく、「女性首相も夢じゃない」と未来を担う日本の若い女性たちにも勇気と希望を与えてくれたと感じます。

今、コロナ禍の中、全世界で見えない敵と多くの人々が闘っています。そして、感染拡大を防止し、国民の命を守るために、各国のリーダーは様々な取り組みと共に、国民に向けて強いメッセージを発信し、その様子は全世界に配信さ

れています。特に注目されているのは、女性リーダーがいる国々です。ドイツ、台湾、ニュージーランド、北欧諸国など。ここでは各国の女性リーダーが持つメッセージの力と国民の信頼関係が見えてきました。

今年度の卒業研究で、前述のシナリオプランニングをふまえて、このコロナ禍の世界、日本社会の動向をまとめた学生は、「女性リーダーが選ばれている社会性や国民性こそがコロナウイルスを抑え込む鍵となっている」とし、女性リーダーを生み出せる土壌が社会の中にあるかどうかによって、社会課題の解決は異なってくるのではないかと指摘しました。

学生たちがコロナ禍の中で2030年の未来について語っていた時、彼女たちは「今より10年後はもっと多様な価値観の中で私たちは生きている。国や民族、文化や宗教、人々の往来など多様性を尊重した社会になるように、私たちも行動しなければならぬし、政治にも関心を持って生きていかなければならない」と語っていました。「女性」という視点を持ちつつも、一人の人間として、社会に対する責任と覚悟から出た言葉であったように感じます。今まで、政治や未来の日本社会について学生と語る機会は少なかったのですが、このコロナ禍の中で、彼女たちと対話する機会が増えました。そして、彼女たちが抱く未来への希望や期待を知り、寄り添うことで、私自身が鼓舞されました。

2020年を振り返ると、様々な壁に格闘しながら、激動のうちに過ぎた1年ではありましたが、彼女たちと私の間では、「学生」や「教員」という立場を超えて、このコロナ禍を乗り越える「同志」としての連帯感が生まれた日々であったように思います。それは、私にとって、ともに学び、励まし合い、希望を持つことで得た人生における貴重な糧となりました。

これからまだまだ乗り越えなければならぬ壁はありますが、彼女たちと共に、多様性を認め合い、育める、そして女性リーダーが様々な場で育っていく未来をこの甲南の丘から見守っていきたいと思います。

女性教育プロジェクトシンポジウムのご案内 本気で女性を応援する女子大学に向けて～女子大学ができることは?

日時: 2021年2月4日(木) 13:30~15:30

開催形式: 832教室+オンライン(Zoom)

内容:

- 【第一部】 報告「女性教育の現場から: 甲南女子大学は今、何をしているのか」
女性教育カリキュラム/図書館における女性教育/女子学生のためのキャリア支援
- 【第二部】 フロア参加型トークセッション「本気で女性を応援する女子大学に向けて」

申し込み方法: 1月28日(木)までに
右記の Microsoft forms からお申し込みください。

奮ってご参加ください!



Microsoft forms QR コード
URL: <https://bit.ly/2LQNGDP>

これからの〈女性教育〉の話をしよう
NEWS LETTER vol.4 2020 Winter
発行日 2021年1月
発行元 甲南女子大学の女性教育の今後を考えるプロジェクト

問い合わせ 代表 ウォント盛香織
e-mail kaorimw@konan-wu.ac.jp
編集責任 米田明美
e-mail yoneda-a@konan-wu.ac.jp